



この人に 聞く

「臨床血液」は会誌としての役割だけではなく、若手の医療従事者の教育ツールとして重要な役割を果たしている。「この人に聞く」では、血液学の発展に寄与した偉大な先生方に貴重な話を伺う。今回は第78回日本血液学会学術集会会長の三谷絹子先生に語っていただいた。

進行役＝小松則夫
順天堂大学医学部内科学血液学講座教授

小松 第5回の『この人に聞く』は、獨協医科大学内科学、血液・腫瘍内科教授の三谷絹子先生をお迎えし、いろいろとお話を伺いたいと思います。先生は日本血液学会の副理事長でもあり、また国際委員会委員長でもあり、国際的な人脈も非常に豊かだと存じます。また2016年10月13日から15日の3日間、Contribution of everyone in hematologyというテーマを掲げ、第78回日本血液学会学術集会を主催されましたが、非常に熱気あふれる学会でした。参加者数も過去最高とお聞きしましたが、何人ぐらいの方が参加されたのでしょうか。

三谷 はい、6,325名の方が参加してくださいました。



女性初の学術集会会長として

小松 多様な企画があったと思います。例えば3つの特別講演に12のシンポジウム、64の教育講演にAsian Joint Panel Discussionなど、数字だけ見ても、非常に盛りだくさんな学会だったと思います。そして何と言っても日本血液学会学術集会の歴史の中で、78回目にして初めての女性の会長だったということです。オープニングセレモニーを見てもきめの細かい非常に素晴らしい演出だったと感じております。初の女性会長として、何か意識されたことがありましたでしょうか。

三谷 そうですね、私自身はこれまでのキャリアの中で自分が女性であるということは、あまり意識しないでやって来た方ではないかと思えます。いろいろなおもてなし的な企画に関しましては、女性だからというよりは私の信条だと思えます。これまで、日本血液学会の中で皆さんからチャンスをいただいて育ていただき、そして会長まで務めさせていただいて、本当にありがたいことだと思います。78年目にして初めての女性会長ということで話題になることが多かったのですが、私自身あまり気負いはなかったと、今振り返っても感じております。ただ一方、実際に会長になってみますと、後に続く後輩もいてほしいですし、ここはぜひ女性の医師や研究者に焦点を当てた企画を行いたいと考え、女性医師・研究者のシンポジウムを組みました。日本血液学会を見ましても、比較的若手の女性は2割ぐらいと多くなってきたとは感じております。一方、年代が上がるにつれて女性の比率が下がるというのも現状です。私は女性として初めての会長をさせていただきましたが、今後続けてくれるであろう女性医師をフォーカスし、彼女たちの活躍を見ていただきたいという思いからこのシンポジウムを企画いたしました。我田引水ではありますが、本当に頑張っている素晴らしい6人の医師、研究者にお集まりいただき、ご業績のみな

らず、ご苦労されてきた点なども伺うことができ、心に残る良い企画であったと私自身は思っています。

小松 若い女性医師の憧れの存在の女性医師の生の声が聞けて、「私も頑張ってみよう」と思った先生も多かったのではないかと思います。素晴らしい企画だったと思います。参加できなかった先生方は、今回の企画に向けて事前に行われた座談会「時代を拓く女性医師たち」の記事が臨床血液誌の57号8巻に掲載されていますので、ぜひ読んでいただきたいですね。学術集会サイトの「会長挨拶」にも女性が輝ける研究、診療の場、そしてそういう学会にしたいとお書きになっていますが、そういう先生の思いがひしひしと伝わってきましたし、全体的に非常に良く準備をされ、考え抜かれた企画であったと思います。先生が回診をされている凛々しい姿なども放映され、オープニングビデオはとても印象的でした。

三谷 オープニングビデオの構成に関しましては、基本的には学会の準備を一緒にしてくれたコアミーティングのメンバーたちとディスカッションを重ねました。ASHやEHAの元会長の先生方からのコメントをいただいたり、獨協医大の様子を皆さんにお見せしたいというのは私のアイデアです。

小松 オープニングセレモニーで行われた和太鼓も迫力満点でした。前回金沢で開催した77回の懇親会でも女太鼓のパフォーマンスに聞き惚れましたが、今回の大きな和太鼓と林英哲さんの肉体系との共演には男の私もそくそくしました。和太鼓は、海外からの参加者にも強く印象に残ったことと思います。

三谷 林英哲さんは、その演奏に物語を織り込むことにより、和太鼓をアートのレベルに押し上げた最初の演奏者でいらっしゃいます。2015年3月に、東京国際フォーラムで開催された東日本大震災の復興を祈念した演奏会に行ったのですが、大変素晴らしいと感動いたしました。重厚かつ華やかで、日本血液学会のオープニングに相応しいのではないかと思います。林さんの演奏の背景には、復興にかける思いや日本人の魂を感じます。それを皆さんが共有していただけたのでしたら大変嬉しいです。

小松 そうですね。心にも体にも響いてくるような大迫力な演奏だったと思います。

三谷 はい、ありがとうございます。

小松 学会の準備に当たり一番心がけた点はどんなところでしょうか。

三谷 学術的な企画のメッセージは、自らの研究にかける思いです。ごあいさつの時にも申し上げました通り、私自身は研究が好きでここまでやって参りました。最近の若い先生は、臨床が忙しくて時間がないという事情もあるのかもしれませんが、研究をやるのだという気概のある方がすごく少なくなって来てい

るというのが実感です。今回の学術集会では、若い先生に世界最先端のサイエンスに触れてほしいという強い思いがありました。会長特別講演でも会長シンポジウムでも、今回はRNAをテーマに取り上げました。近年、RNAは蛋白翻訳の鋳型になるだけではなく、細胞内の生命現象において様々な役割を担っていることが明らかになり、研究の世界が急速に広がりを見せています。世界の第一人者の研究成果を目の当たりにして、若い先生の研究への興味が膨らんでくれたのでしたら大変うれしいです。



7つのメッセージに込めて

小松 先生のライフワークであるEV11とRUNXに関する会長講演も非常に感動的な講演でした。講演の中で若い人への7つのメッセージがすごく印象的でした。先生の若者への思いがたくさん詰まったメッセージだと思います。

- At the beginning, you need to find a good mentor who is talented and honest to Science.
- The next step is to make your own hypothesis, even if you are a graduate school student.
- Unfortunately, you would usually fail to demonstrate your hypothesis. You should accept what you do not want to see.
- However, negative data are merely junk. If you see with a cold eye, you can find the truth lurking among them. That is what guides you to the next stage.
- If you want to fulfill your mission as a scientist, you need intention to persist.
- This is not so easy, but I believe that understanding of molecular basis in various kinds of diseases leads to fundamental interpretation of life phenomenon.
- Please find out valuable things and enjoy an exciting life.

三谷 かなり大上段に振りかざしたことを申し上げてしまいましたが、あのメッセージは、研究がしたくてもそれが思い通りにならない環境の中で、私が考え続けて来たことなのです。自分が第一線で一流の研究者として活躍してきたのでしたら、また違うメッセージになっていたかもしれません。サイエンスをやりたくて仰ぎ見てきたものの、手が届かなかった者からの若者へのメッセージであるとらえていただければ、ありがたいと思います。

小松 いつまでも拍手が鳴り止まないほど、聴衆が感動した素晴

らしい会長講演でした。先生が伝えたいお気持ちは参加者にしっかり伝わったと思いますよ。

三谷 ありがとうございます。

小松 懇親会でのジャズピアニストの木住野佳子さんの演奏会も華やかでしたね。

三谷 獨協医大はご存知のように栃木県にございます。栃木県の宇都宮はジャズの町であるということを少し強調したくて、木住野さんに演奏していただきました。演奏曲も私が選ばせていただきました。

小松 そうなんです。ジャズの世界では非常に有名な方ですし、素晴らしい演奏だったと思います。ジャズ好きな人たちは皆さん前の方で聞いていましたけど、会場がちよっとざわついてうるさくて申し訳なかったですね。

三谷 懇親会の出し物を考えるのは、プログラムを考えるのと同じくらい難しいです（笑）。

今回あらゆる準備を、プログラム企画委員会、学会事務局およびコンベンション会社の方々と進めて参りました。やるべきことは山のようにありましたが、ご参加いただいた先生方に、最先端の研究および質の高い教育をお時間の無駄がないように提供したいという思いで、プログラムの配置など、自分なりにかなり時間を割いて考え、気も遣いました。また、血液の各領域の先生方が切磋琢磨できるような雰囲気を作りたいと思いました。お陰様で皆さんにご支援をいただき、多くのことが達成できたと感謝しております。会長講演はあまり上手にできませんでしたので、残念に思っているのですが、それ以外のことは皆さんのご支援の賜物です。

小松 次に、先生がこれまで歩んできた研究生活のことについてお伺いしたいと思います。私が最初に研究者としての先生にお会いしたのは自治医大でした。自治医大にいらしたのは何年頃ですか。

三谷 1987年頃ですね。

小松 今から30年も前になりますね。お互い若かった（笑）。たしか先生は佐藤裕子先生のところに染色体の解析を勉強に来ていたと記憶しているのですか。

三谷 そうです、そうです。小松先生とその時にお会いしました。

小松 それが最初ですね。

三谷 かなり昔ですね（笑）。

小松 1年間程度いらっしゃいましたか。

三谷 いや3ヶ月間なのです、実は。

小松 3ヶ月ですか。

三谷 はい。

小松 僕は1年ぐらいかと思っていました。



左：小松則夫先生，右：三谷絹子先生

三谷 医局のカンファランスに出席させていただいたり、夜の宴会にもお誘いいただいていたので、少し長くお世話になったように感じられたかもしれません（笑）。

小松 そうなんです。昔から存在感があったということですね。

三谷 あれはちょうど出産前の3ヶ月間で、病棟の仕事をするのは少し大変な時期でした。この時間を自分の勉強のために使わせていただこうと、自治医大に勉強しに行きました。

当時は、須田年生先生や元吉和夫先生もいらっしゃいました。もちろん三浦恭定先生が教授でいらっしゃいました。

小松 もう高久史麿先生はすでに東大に戻られていましたから、高久先生の教室からの短期留学ということになりますね。

三谷 そうですね。

小松 僕は第一研究室（イチケン）というところで研究（らしきこと）を行っていましたが、佐藤先生も同じ研究室でしたので、先生ともお会いする機会が多かったのだと思います。

三谷 懐かしい。

小松 その時はもうすでに平井久丸先生のご指導の下で研究を始められていて、それから自治医大に来られたんですか。

三谷 いやそれは、実はそうではないのです。私は2年間の研修を終了した後も、当時三井記念病院にそのまま残っていたのですが、「いつまでも外にいと、研究をする機会を失うから、一度は大学に帰ってきなさい」と当時東大血液グループの研究室を率いておられた浦部晶夫先生に言われたのです。もうずっと臨床家でもいいと当時の私は思っていたのですが、浦部先生のお言葉に従い、大学に帰ったのです。当時は造血コロニー研

究の全盛期で、ラボをあげて皆さんコロニーを作っていたんです。私一人女性ですし、先輩と同じことをやるのは難しいと考えておりましたが、おそらく浦部先生もそう思われていたらしく、「コロニー、染色体」と紙に書いてくださり、「染色体研究の分野には、Janet D. Rowley という有名な女性研究者がいます」とつけ加えられました。結局私は「染色体研究」を選択し、自治医大の佐藤裕子先生のところへ染色体分析を一から習いに行きました。

小松 佐藤先生はその当時、染色体の研究を精力的に行っていたからね。

三谷 そして、3ヶ月後に東大に戻り、染色体の研究を一人で2年ぐらいうりました。他に一緒にやってくれる人もおらず、佐藤先生にご指導をいただきながら、手探りで研究を進めました。そんな中で、Ph 陽性の脾臓原発のリンパ腫を見つけました。ちゃんと FISH で BCR-ABL が融合していて、190 kDa の BCR-ABL が発現していました。今考えると、骨髄で白血病細胞が増殖していない、珍しい Ph 陽性 ALL であつたのかもしれない。小さな発見をしながら、研究の面白さを体感できた時代であつたと思います。



ロックフェラーでの留学

小松 留学は1989年ですか。

三谷 はい、そうです。

小松 ポルフィリンの研究で世界的に有名なロックフェラーの佐々茂先生のところに留学されましたね。現在は北大の教授を退官された藤田博美先生も佐々先生の下で一緒に仕事されていましたが。

三谷 藤田博美先生がいろいろ教えてくださいました。しごかれましたね。

小松 私が留学したのは1990年で先生と少し重なっています。

三谷 そうですね、NYで先生とは少しの期間一緒でした。

小松 私が留学したのはニューヨーク血液センターでしたが、メンターは John Adamson 先生（当時は研究所長）でした。John Adamson 先生はシアトルからニューヨークに移動したばかりでしたので、研究室はまだ準備状態で大変な思いをしながら実験していました。試薬の注文から培地の準備まで、全てを自分でしなければならぬ大変でした。ある時にどうしても run-on assay（あるいは run-off assay とも言いますが）を行わなければならぬと、留学中の三谷先生に突然電話を差し上げて、「三谷先生、run-off assay をやりたいんだけど、

先生、誰かご存知ないですか」と聞いたんです。すると「後ろにいますよ」と（笑）。

三谷 藤田先生だったのですよね。

小松 そうなんです。あの藤田先生がいらしたんですね。それをきっかけに藤田先生に教えてもらうことができて、それでなんとか論文はまとめることができたんです。あの時、先生にご紹介いただき本当にありがたかったです。感謝しております。

三谷 お役に立てたのでしたら、うれしいです。

小松 それをきっかけに藤田先生とも非常に仲良くさせていただいて、かわいがっていただきました。金曜日の夕方になるとロックフェラーのファカルティクラブで無料のビールが振る舞われるので、藤田先生を誘ったのか、藤田先生に誘われたのか、記憶は定かではありませんが、とにかくよく飲みました。佐々茂先生もものすごく紳士的で優しくて素晴らしい先生だったですね。

三谷 優しさの中にも、研究に対する厳しさがおありだったと思います。その2年間は私のキャリアの中でも少し異色で、佐々先生の下でヘム代謝酵素の遺伝子発現の研究をしておりました。帰国後はまた染色体研究に戻り、それから分子生物学、発生工学へと研究を進めることになりました。

小松 そうですね。先生は留学中も論文をたくさん発表されましたね。

三谷 はい、素晴らしい先輩や上司に恵まれ、本当に楽しい留学生活でした。ただ英語は全く上手になりませんでした。研究室では日本語を使っておりましたので（笑）。

小松 素晴らしい場所で素晴らしい研究をされて、佐々先生との出会いは非常に大きかったと思います。佐々先生の研究室への留学というのは、浦部先生の紹介ですか。

三谷 そうです。当時主人がコロンビア大学に留学することが決まっておりましたので、浦部先生にご相談したところ、「佐々先生のところへ行かれたらどうですか」ということになり、もう鶴の一声で決まりました。浦部先生ご自身も、佐々先生の研究室でお仕事をされていた時期がおありでした。



東大での「研究者」時代

小松 なるほど。そして2年間の留学生活を終えて、ご帰国の後、東京大学の平井久丸先生の研究室に入るようになったわけですね。

三谷 はい。平井先生に出会って分子生物学を教えていただいたことが、本当に研究者としてのスタートだったと思っております。



す。平井先生がいらっしゃらなかつたら、とてもここまではできなかったと。

小松 平井先生は本当にすごい先生でしたね。残念ながら51歳でお亡くなりになりましたが、これからも教授として益々のご活躍を期待させていただきに、本当に残念なことでした。平井先生の教室からは1ヶ月に1回ぐらい論文が発表されるんですよね。しかもすごい論文が。

三谷 そういう時代でした。今では想像もつきません。

小松 今は日々の臨床に追われ、なかなか研究に特化できない歯痒い状況にあるとは思いますが、それは単なる言い訳にしか聞こえないですね。あの時代でも臨床医は多忙を極めていましたから。特に平井先生は無菌室を立ち上げたり、無菌病棟を立ち上げたり、途轍もなく忙しかったと思います。三谷先生をはじめ多くの先生方が大活躍されて、すごい時代でした。私はもうあれ以上に赫赫たる業績を上げる研究室は今後もそうは出ないのではないかと考えています。一流の国際誌に掲載されるようなレベルの高い研究を続けることのできる研究室とは、いったいどんな研究室なのだろうといつも気になっていました。自分たちにはちょっと想像ができないですね。自治医大でも多くの医師が精力的に研究を行っていましたが、あそこまでハイレベルな論文はなかなか出ませんでしたね。どうしてあれだけ論文が出せたのか、この機会にぜひお聞きしたいですね。

三谷 平井先生ご自身は言うまでもなく非常に優秀な方でしたが、アカデミックに頭脳明晰だったというだけではなく、仕事

のメリハリの付け方が上手でいらしたので、大事なことと大事ではないことを切り分け、大事なことに集中して成果を上げられたのだと思います。研究室は、無菌治療部を含めて4つあり、いろいろな人がいるいろいろなテーマで仕事をしていましたけれど、1週間に1回は必ず平井先生とのミーティングがあり、データをお示しして、その後の指示をいただいていた。その週1回のミーティングの時までに成果を出さなくてはいけないという空気があったので、全員真剣でした。

小松 ミーティングの時間はどんな時間帯に行っていたのですか。

三谷 ミーティングは日中に行っていました。半日ぐらいかけて全員と会って生データを見ていらっしゃいました。全ての領域で指導力を発揮されていました。分子生物学でもそうですし、免疫学でもそうですし、あらゆる分野の最先端を常に勉強されて、常に一流でいらっしゃいました。当然ながら、平井先生の下で働いている人は楽ではありません（笑）。小松先生の自治医大時代は私の東大時代と重なりますので、よくお分かりいただけたと思いますけれど、朝から晩まで働いて当たり前前の時代でしたから。

小松 あのペースで論文を発表し続けるというのは、並大抵の努力じゃできませんし、土日もなく祝日もなく、平井先生は研究されていたのでしょうか。

三谷 そうだと思います。

小松 「頑張ろう」というモチベーションを保ち続ける。それが僕はすごいなと心底思うんです。どうしてあれほど高いモチベーションを保てたんですか。

三谷 平井先生は一人一人の研究者を育てることをとても大事にされていました。当時は血液学会のシンポジウムと言えば、あらゆる領域に平井研からシンポジストが出て、話す機会をいただいていた。大変なことではありますが、自分の名前で良い仕事ができれば、「よし！ また次も頑張ってみよう。そうしたら、また次の発見ができるかもしれない」といった具合に、平井先生がいらっしゃる間はいい意味でのポジティブサイクルがずっと回り続けていたのです。私自身はボスの立場になっても、とても同じことはできません。平井研は最高の好循環でやる気と成果を回していたのです。皆やればできると思っていましたし、事実できました。小松先生がおっしゃる通り、ちょっと特殊な世界だったかもしれないですね。

小松 平井先生のお力が一番大きいとは思いますが、そんな中で三谷先生が中心になり研究室を支えていたことは周知の事実ですよ。そういう人がいなければ、研究室というのはうまく機能しませんから。平井先生の期待に応えてきたという意味でも三谷先生のご努力も推して知るべしだと。

三谷 謙遜でもなんでもなく、私は大した能力はなかったのですけれど、番頭ぐらゐの働きはできたかなと（笑）。

小松 研究室で大事なものは何かと考えた時、教授の指導力は言うまでもなく、実はそれを支える大番頭という存在が非常に重要だと常々感じています。例えば高久先生のところに浦部先生という大番頭（失礼な言い方ですが、この言葉以外に適当な言葉が浮かびませんのでご容赦ください）がいたように、平井研の中で大番頭として三谷先生はやってこられたわけですから。平井研から発表された論文を読めば分かりますけど、平井先生の要求は相当なものだと僕は想像します。自分一人がいくら頑張っても、若い人たちの間に入ってってくれる人がいないと組織はうまく回らない。それを支えた番頭として頑張った三谷先生の努力は謙遜しなくていいと思います。

三谷 恐れ入ります。

小松 ところで、三谷先生が今まで生きてこられた中で、先生に一番影響を与えた人はどなたですか。

三谷 一番は研究者としての基礎を作っていたいただいた平井先生ですね。そして、高久先生は人間として広く大きな方で、心から尊敬しております。

小松 高久先生は三谷先生の会長講演の座長をしてくださいましたね。

三谷 本当に光栄なことです。

小松 インタビューの冒頭で紹介した7つのメッセージですが、三谷先生が若者にいろいろ伝えようという強いお気持ちが伝わりましたけれど、これからの日本の、そして世界の血液学を支える若い人たちをどのように育成するのかということが、これまでにインタビューさせていただいた先生方とも話題になりましたが、若手医師や研修医を対象にしたセミナーや研修会も日本血液学会で開催していますが、血液内科に入局してくれる研修医は全国的にみてもそんなにいないですよね。

三谷 多くないです、特に地方では。

小松 日本血液学会の副理事長の立場として、どうやったら血液内科医を増やせるのか。1つの大学に集中するのではなく、全体として増やしていかないといけないんじゃないかと思うんですけど、先生、名案はありませんか。

三谷 難しいですね。正直言って、抜本的な打開策を思いつかないのです。私たちの努力不足もありますが、なかなか血液学の面白さを理解していただくのが難しいように思います。ここを理解していただけないと、「そんなタフワークをやるのは嫌だ！」という話に終わってしまいます。

小松 当然、血液内科医というのはすごく激務だと思いますし、患者さんを診ることは肉体的にも精神的に相当タフでないできませんから、いろんな人に「入局してください」と声をかけ



ればいいというものでもありませんしね。

三谷 そうなのですよ。

小松 全国的に血液内科医を増やすことができないでいますが、好きでなければとてもやれるものではない。あるいは顕微鏡を見るのも好きでなければいけないとか、ちょっと特殊かなとは思いますがね。

三谷 特殊ですね。

小松 入局者が多い大学の先生方に聞くと、かなり教育に時間をかけていますね。どんなに忙しくても何があっても教育のため、学生と話すための時間を捻出しているとおっしゃいます。

三谷 そうですよ。血液学の面白さを少しでも学生たちに伝えないといけないです。

小松 それはわれわれの役割だと分かっていますが、忙しいやら時間がないやらついつい言い訳ばかりで猛反省です。

三谷 私も同様です。

小松 「臨床血液」への要望をぜひお聞かせください。

三谷 私の教室でも、可能な限り「臨床血液」に症例報告を投稿するように、意識し努力しております。「臨床血液」に自分で書いた論文が掲載されることは、若い人にとっては大きな励みになります。これを第一歩として血液の道に入る人もいらっしゃると思うのですよ。私自身も、第一歩は「臨床血液」に掲載された症例報告です。

小松 今年の「臨床血液」の採用率は80%ちょっと超えました。せっかく書いていただいた論文なのでなるべく採用したいと。それでも2割程度の論文はどうしても不採用と判定せざるを得ない。不採用になる多くの投稿論文に共通して言えることは、投稿前や再投稿の際に指導医が十分に指導していないことが見て取れるということです。診療や実験で忙しい日常の中、時間を絞り出して頑張っておいた論文ですので、しっかり指導し、また指導を仰いだ上で、投稿していただきたいですね。

三谷 論文は1つの作品です。指導者には責任がありますし、指導を受けた方も論文執筆を通して進歩・成長していただきたいと思います。そうすれば、また、次の良い論文につながりますね。

小松 インタビューも最後に近づいてきたところで、三谷先生のストレス解消法を教えてくださいませんか。

三谷 えー、ストレス解消法ですか。もうどどん溜まっていくばかりで(笑)。私は、絵を見るのが好きですね。

小松 先生の趣味は絵画、美術鑑賞なんですね。

三谷 見るだけです。描く才能はないのですけれど、美術館が大好きです。

小松 今までに一番印象的だった美術館はどこですか。

三谷 ローマのボルゲーゼ美術館です。ベルニーニの彫刻やとても美しいラファエロの絵がある邸宅美術館です。ここが一番好きな美術館です。



努力

小松 「この人に聞く」定番の質問ですが、三谷先生の座右の銘は何でしょう。

三谷 若い頃はけっこう文学少女でしたが、最近はずごく忙しくて、あまり座右の銘を考える時間はないです。でも基本的には、会長講演でも申し上げましたけれど、高久先生にいただいた「努力」という言葉ですね。高久先生は、よく、「今の自分

が置かれている環境や立場がパーフェクトではなかったとしても、その中で努力をして自分のできることをやりなさい」とおっしゃっています。2文字では、座右の銘にはならないでしょうか？ 私の座右の銘は、高久先生からいただいた2文字、「努力」です。

小松 私が自治医大から山梨大学に異動する際に高久先生から頂戴した言葉は「前進」です。

三谷 「前進」ですか。なるほど。少しずつ(小松先生には当てはまりませんが)でも前に進むということが大事ですよ。今回の学術集会の女性医師・研究者のシンポジウムでも、皆様同じ意見でした。

小松 高久先生直筆の「前進」と書かれた額を教授室の壁に掛けていますが、友人から「お前の部屋の中で一番高価なものはこれじゃないか」と。まさにそうなんです。高久先生の字ってとても優しさを感じますし、先生の温かさが伝わってきます。

三谷 そうなのです。私のプレートも直筆です。高久先生が東大をご退官される時に、第3内科の医局員全員のために、1枚1枚手書きをされて、それを焼いてくださった益子焼のお皿なのです。1枚1枚「努力」とお書きになったのですよ。一人一人に与えられた「努力」なのです。

小松 そうなんですね。私も欲しかったですね。後進への熱い情熱を持った先生の指導を仰げたということは非常に幸せなことですね。最後に三谷先生からも日本血液学会会員の先生方に熱いメッセージをお願いいたします。

三谷 日本血液学会は、私にとりましては、家族と同じです。若い頃から諸先輩方にご指導をいただき、育てていただき、今回の機会を頂戴することができました。心より感謝しております。今後も血液学会が若い先生の切磋琢磨の道場として発展できますように、私自身は微力ながら引き続き尽力させていただきたいと思います。今後ともどうぞよろしくをお願いいたします。

小松 今回の「この人に聞く」は第78回学術集会会長を務められた三谷絹子先生にお話を伺いました。お忙しい中、長時間にわたり誠にありがとうございました。